

氏名	山本 澄奈
ヨミガナ	ヤマモト スミナ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	論博第 1 号
学位授与年月日	2025 年 3 月 15 日
学位論文題目	18 世紀のウィーンにおけるソプラノ歌手の比較研究 ——楽譜から読み解く初演歌手の声——
博士論文審査委員会	（主査） 教授 小森 輝彦（声楽） （副査） 教授 武石 みどり（音楽学） （副査） 教授 釜洞 祐子（声楽） （副査） 教授 藤田 茂（音楽学） （副査） 松田 聡（音楽学） （大分大学教授）
博士演奏等審査委員会	（主査） 教授 小森 輝彦（声楽） （副査） 教授 釜洞 祐子（声楽） （副査） 教授 水野 貴子（声楽） （副査） 教授 佐藤 俊（ピアノ） （副査） 教授 大谷 康子（ヴァイオリン） （副査） 教授 藤原 豊（作曲） （副査） 教授 武石 みどり（音楽学） （副査） 佐々木 典子（声楽） （東京藝術大学教授）

## 審査結果の要旨

### 1. 博士論文審査委員会

日	時	2025 年 2 月 8 日（土）10 時 00 分～12 時 30 分
場	所	東京音楽大学 中目黒・代官山キャンパス C 405
判	定	合
審査結果の要旨	<p>本論文は、18 世紀ウィーンのソプラノ歌手の比較研究を通じて、歌手の声質や歌唱技術が当時の作曲家に与えた影響を楽譜分析の視点から明らかにするものである。特に「ファッハ」という概念を本格的に取り入れ、オペラ研究や演奏実践に資する知見を提示している点が高く評価された。先行研究の整理と独自のアプローチを組み合わせることで、歌手研究という新たな分野に貢献し、後続の研究にも影響を与える可能性がある。</p> <p>本学の論文博士第一号となるにふさわしい内容だった。</p> <p>以下の点が特に評価された。</p> <ol style="list-style-type: none"><li>研究の独創性と学術的貢献<ul style="list-style-type: none"><li>18 世紀のオペラ研究において、歌手の声質・技巧に基づいた楽譜分析を詳細に行い、作曲家と歌手の関係性を新たな視点で考察した点が高く評価された。</li><li>「ファッハ」概念を適用することで、各歌手の特性がどのように役割の創出に影響を与えたのかを示し、オペラ研究の発展に寄与する内容となっている。</li></ul></li><li>予備審査で指摘された課題の克服<ul style="list-style-type: none"><li>声種分類の明確化に向けて、各歌手の声域・歌唱技術の特徴を整理し、音楽的観点からより精度の高い分類を行った。</li><li>データの整理・分析方法についても、選定した楽譜の理由を詳述し、各歌手の特性を示す具体例を増やすことで、論理の明確化に成功している。</li><li>比較分析の強化により、音域・技巧・装飾性に関する詳細な比較表を導入し、視覚的にも理解しやすい内容となった。</li><li>初演歌手の声質や歌唱技術が作曲家の楽譜にどのように影響を与えたかについても、具体例を挙げて説明し、楽譜との関係性をより明確に示した。</li></ul></li></ol> <p>以下の点については、適宜修正を求めたい。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>文章表現や表記の仕方が不適切なものや事実関係に即していない箇所</li><li>参考文献の年号が本文と参考文献表で一致していない点</li><li>表の番号と本文の説明が対応していない点</li><li>助詞の用法に不正確な箇所が見られる点</li></ul> <p>具体的な修正要請については、各審査員から個別に連絡を行う。</p>	

## 2. 博士演奏等審査委員会

日	時	2023 年 10 月 11 日（木）19 時 15 分～20 時 00 分
場	所	東京音楽大学 池袋キャンパス B スタジオ
判	定	歌手研究という新しい分野での研究と、演奏との結びつきを強く印象づける演奏で、成果を出した。 演奏自体は、序盤は硬さが見えたものの、徐々に実力を発揮し、後半は高いレベルの演奏を披露した。
審査結果の要旨		<p>歌手研究という新しい分野で、先行研究も少なく手探りながら、丁寧な調査を元に認識を深め、研究を続けてきた。この学位審査演奏会では、その認識に根ざした演奏を披露してくれた。</p> <p>古典的な作品にマッチした発声技術、音色の選択が功を奏した。序盤は緊張もあったのか、実力が出し切れていない様子が見られたが、徐々に自由になり、後半では高いレベルの浪奏を聴かせてくれた。</p> <p>本学の博士課程、博士リサイタル、学位審査では声楽の場合、演奏者自身が解説をして演奏をする事が、聴衆の理解を深める趣旨で行われる事がしばしばある様で、山本澄奈さんもその方法をとったが、審査委員によっては違和感を感じるケースもあったようだ。山本さんの MC の内容については、配付した資料と重複する部分が多い、不必要なアナウンスも含まれていた、などの指摘があったものの、声楽という声を使う楽器の浪奏のあいだに、負担となり得る解説を入れたことは、理解の助けになった事が一定の評価を得ている。</p> <p>論文執筆の際に楽曲のアナリーゼは行っていると思うが、今回の「演奏の為の楽曲アナリーゼ」という点では、ヘミオラなどリズムの処理、スラーなどアーティキュレーションの処理、クレッシェンドの表現、転調への対応など、更に研鑽が求められる部分があった。この点は今後努力をすることで、さらに洗練された演奏が可能になるだろう。</p>

以上